

はじめに

この物語はフィクションです。

登場する人物、団体等はすべて実在しません。

あらかじめご了承ください。

④「僕はサキュバスに勃起させられる」

家の畑から適当に野菜を見繕ってサラダにしたものと、パンに干し肉を挟んだものの二品という簡素なメニューの食事をする。

「……あの、そんなに見つめられてたら食べにくいんだけど……」

「えー？　ちよつとずつパクパクってご飯を食べるリクも可愛いなあって思ってたね」

サクはテーブルに座って食事をする僕の向かいの席に座って、頬杖を突きながらずっとニヤニヤとご満悦の表情だった。

「……言っとくけど、「可愛い」って言われる度に僕はへこんでるんだからね」

「うんうん。可愛い可愛い♪」

「………」

僕の主張を聞き入れる気の無いサクに反抗するように、ご飯を一気に掻っ込む。

「もぐっ、もがもがっ、もぐっ！ もぐもぐっ！」

この可愛くない食べ方ならどうだっ！？

「可愛くないのが逆に可愛いっ」

……。止めた。普通に食べよ……。こいつにはきつと何をやっても無駄だ。

……。

「……ご馳走様でした」

「お粗末様でしたあ」

……作ったのお前じゃないけど……。と、心の中で一応ツツコンでおく。

「……さつてとお……。……じゃ、エッチしよっかあ」

「何その、「散歩でも行こつかあ」みたいなノリは…。どんだけ性欲の塊なんだよ…」

「サキュバスと言えば性欲の塊でなんぼでしょー。エッチなことをしなかったらサキュバスは生きていけないわ！ 仲間同士が集まったら、いつつも猥談かレズセックスしかないんだから」

れ、レズセックスって…。サキュバス同士でもそういうことするんだ…。

「って、精液搾れるわけじゃないんだからあんまり意味無くない？」

「単純に気持ち良いことが好きなの♪ 尻尾を使えば疑似的なオチンチンの代わりにもなるしね。…ほおら、…エッチな形してるでしょう？ しかも興奮するとすっごくヌルヌルしてきちゃうの♪ 感度もバッチリよ？」

僕の目の前にニョロニョロと動いてきた、スピード型になっている尻尾の先端は、ぷくつと柔らかそうに丸みを帯びていた。：じつと見たことはなかったけど、サキュバスの尻尾ってこうなってるんだ：。自由自在に動かせるみたいだし、これなら確かに女のコ同士でも大活躍しそうだ。

「挿れて欲しかったらリクにも挿れてあげるわよ♪」

「挿れて欲しいわけあるかアホっ！」

「えー：？ 気持ち良いのに：」

本気で残念がるサク。本当に僕のお尻を犯すつもりだったのか：。

「：なんかそんな話してたらムラムラしてきちゃったかもお：♪」

「：：：：っ！」

急にパンツを下ろし、恥部を露わにするサク。

「ちょ、いきなり何する気だよ！？」

「んー？ ムラムラしてきたからオナニーしよっかなあーって…♪ …んっ、…あっ♪」

自分の指で、皮の被ったクリトリスを弄り始める。人差し指でゆっくり、でもゴシゴシと弄る動き。…女の人のオナニーなんて初めて見るけど、ああいう風にするんだ…。…って…！？

「そういうのは僕の目の届かないところで一人でやってよっ！」

「ええ…？ 私の…んっ、エッチな姿を…、っ、見てたら、リクも興奮するかなあって、思ってたえ…っ♪」

喋りながらも指の勢いはどんどん増していく。いつの間にか、皮が剥けてピンピンになっているクリトリスを直接弄っていた。

「いや、興奮っていうか……。なんか見ちゃいけないものを見てるみたいで悪いよ……」

「ほんとっ、……リクってば釣れないわねえっ、……んっ、……あっ、……あっ♪」

「……じゃあ、僕はちよっと散歩でも行ってくるよ……」

「……そんなの、っ、ダメに決まってるでしょう……？　ふふ……♪　ほらあ、私の目を見なさいっ、リクう……♪」

「ちよ、それ反則だっつ！」

とっさに目を閉じようとするが、サクの目が赤く光る方が一瞬早く、僕の身体からまた自由が奪われてしまった。

「あはっ♪　これでえ、……んっ♪　リクは私のお、オナニーを見続けるしか……、

あんっ♪……できなくなっただわよお？」

…この技、本当にやめて欲しい…。

「何、不満そうな顔してるのよお？ …あ、あつあつ♪ …女のコのオナニーを
間近で見れるなんてえ、んんっ、…滅多に無いわよ…？ くすくす…♪」

「特に見たいとも思わないんだけど…」

「いいから見ろのっ！ ほらあ…、リクう、『跪いてえ…、っ、オマンコ近く
から…、あっ、見上げるように、私を見なさいい』…♪」

命令されるがままにサクの前に跪いて、鼻先がオマンコに触れてしまいそう
になる距離からオナニーを見上げさせられる。

「…ふふ、どう？ エッチな匂いがしてえ…、んんっ♪ …堪らないでしょう？」

既に指先がオマンコの中に入って、クチュクチュと音を立てながら内部を搔
き回している。…不思議と甘酸っぱい、人間のそれとは違う匂いがした。

「…な、なんか、この匂い…。…変…だよ…。…」

けっして心地良い匂いではない。でも不思議と嗅いでいたくなるような…。そんな…。

「…あはっ、リクう…。♪ あっ、…。ん♪ …ズボンの下…。膨らんでるわよ…。？」
「っ！？」

僕のオチンチンはズボンの上からでも分かるくらいに膨らんでしまっていた。さっきの朝勃ちとは違う、本当の勃起だった。

「な、なんで…。っ」

「サキュバスの愛液にはねえ、媚薬効果があるの…。♪ 匂いを嗅いただけでもそんなになっちゃうのに、直接オチンチンに塗ったくったらどうなっちゃうと思う？ …くすくす♪」

…！ …この匂いを嗅いじやダメだ…！ 慌てて鼻から息を吸わないようにする。

「ダメメっ♪ …リクう？ 『すんすんってえ、オマンコ汁のエツチな匂いを嗅ぎ続けなさい』？」

！？ ……すんすん、すんすん…。

またしても命令されてしまったことにより、匂いを嗅ぎ続けることしかできなくなる。

「…あ、あああ…っ、……あっ……、あああ…っ」

サクの指を掻き回す速度が上がっていき、それに伴って匂いの強さも増していく。まるで脳まで浸透してしまいそうなほどクラクラするその香りに、アルコールでも回ってしまったような火照った感覚が僕を襲う。

…クチュクチュっ♪ クチュクチュっ♪ クチュクチュッ♪

既にオマンコの中は愛液が零れてしまうくらいに濡れそぼっていて、指の勢いで飛び散る液体が僕の顔に掛かってしまう。

「ほらあ、っ、リクう、『お口を開けて、私のオマンコ汁、…ちやーんと味わいなさい』？ あっ、あんっ♪」

「やっ、やだあ…！ …っ！？ …ん、んあああ…っ…っ、や、やあああ…っ…抵抗も空しく、口が勝手に開いてしまう。

「んんっ♪ …本当は直接オマンコ舐めさせたいけどお…、あんっ、リクの心を奪うには、たあーっぷり焦らしてあげなきゃいけないみたいだからあ…。自分から我慢できなくなっちゃうまで焦らしてあげるう…♪」

朝勃ちの一件で、あまりにも強引すぎるのはいけないと考えての焦らしプレイ
なんだけろうけど、僕の身体の自由を奪っている以上、強引なものには変わらない
よ…っ！？

…心のツツコミも空しく、僕の口の中にはサクのオマンコから飛び散る愛液が
入ってきてしまう。

「ほらあっ♪ もっとお、もっといっぱいい…っ、んっ、んああっ♪ あっあっ
あっああんっ♪」

クチュチュっ、クチュクチュクチュっ！

指の勢いが更に増し、愛液の飛散する量が増え、僕の口にどんどん入ってく
る！

匂い通りの甘酸っぱい味が口の中に広がる。直接飲んでしまったことで、僕の身体 of 火照りもどんどん増していく……っ！

「あくうっ ♪ …… まだまだよお？ もっともおーっと堪えなくさせてあげるっ ♪」

クチュチュっ、クチュクチュクチュっ！ クチュッ！ クチュチュチュッ！

サクは片手でオマンコの中を掻き回しながら、もう片方の手でクリトリスを素早く弄り回す。

「あああああっ！ もっ、もうっ、い、イツちやうからあっ ♪ 全部っ、全部飲み干しなさいねっ！？ あっ！ あっあっあっ ♪ イクっ、イクイクイクううううううう ♪」

「ッ！？」

びゅびゅッ！　びゅうううううッ♪　びゅびゅううううッ♪

サクの身体が痙攣するように震えて、跳ね上がると同時にオマンコから大量の液体が噴出される。

「んんんっ！？　んあああっ、んあああああああああっ！？」

さっきまでの甘酸っぱい味と違って、サクの絶頂と同時に出了それは甘しよっぱい味。……潮を噴いたのだ。それは、僕の口の中めがけてビュルビュルと入り込んでくる。

そのあまりの量に口内はすぐに液体で満たされ、口の端からは収まり切らない分のそれがダラダラと零れ落ちてしまう。

「……あ……っ、……あ、ああ……っ♪　……ああはあっ♪　……お姉ちゃんの絶頂汁、……
美味しい……？」

身体を小刻みにビクビクさせながら、ご満悦の表情のサク。

「ほらあゝ、リクうゝ♪ 『全部ちやーんとゴツクンしなさい』？ ぜえーん
ぶねえゝ♪」

ゝッ！ め、命令ゝッ！

ゝゝゝごくっ、ゝごくごくっ、ゴクツゴクツゴクツ♪

真夏日に冷たい水を一気に飲みする時のような音を鳴らしながら、口の中の液体を全部飲み干してしまう。

「ゝゝゝっ、ゝゝゝあ、あああああつ！？ な、何これえええええっ♪ 熱いいいっ、あついよおおおおおっ♪」

喉を通った液体は胃の方へ流し込まれたはずなのに、まるで脳みそが液体で満たされてしまうように頭の中から熱が上がり、すぐに全身から汗が噴き出した。

「ふふう…♪ リクってばすっごいエッチな声出ちゃってるう…。オマンコ疼いちやう、エッチな声え…♪ オチンチン、すっごく苦しそうになってるよお？」
お、オチンチンっ…。…ズボンを突き破ってしまいそうなくらいパンパンになっ
てしまっていた。

「ほらあ、これどうして欲しい…？ お姉ちゃんに言ってご覧なさい？」

「あっ、ああああっ♪」

サクが焦らすように僕のパンパンになったオチンチンを優しく撫でる。その刺激だけでももうイッてしまいそうだった。

「このまま出しちゃったらパンツもズボンも染みになっちゃうよお？ ほらあ、早くズボン脱ぎ脱ぎしてお姉ちゃんと気持ち良いことしよおーよお？」

「あうう…っ♪ あああ、ううう…っ♪」

…、こ、このまま誘惑に負けてサクと「して」しまったら…。凄く気持ち良いだろう…。

そしてそれは僕の「死」も意味する。こんな状態であの、男の精を搾り取るオマンコの中へ挿れてしまったら、死ぬまで射精してしまうのは間違い無い。

…別にそれでいいじゃないか。元々死のうと思ってあの森へ行っただ。今更躊躇うことじゃない。

……。

でも僕の理性はまだ崩壊しなかった。その原因は死ぬのが怖いからというわけではなく、もっと別の部分にある。

…ここでも何の感情も無いただの快楽に身をまかせて身体を重ねることで、僕は「あの人」を裏切ることになってしまふのだ。

もうとつくに僕のことを裏切ったあの人を、今度は僕が裏切ることを躊躇うなんて、自分でも馬鹿だと思う。

でもそれをしてしまったら、結局あの人と同じになってしまう。あの人と同じ風に汚れてしまう。それだけは絶対に嫌だった。

……今になって僕は自分自身で気付かされた。女の人に対して全く興奮しなくなってしまうていたのは、愛する人に裏切られたショックで女性不信になったわけではなかった。

：僕が信じていた愛を、僕までもが裏切ってしまったら、本当に何も無くなってしまうからだ。

あの人がいつか帰ってきてくれるかもしれない、なんて都合の良いことはもちろん考えていない。

ただ自分自身を保つために、僕は僕の信じていた気持ちを守りたかったんだ…。

……。

…そしてそれを思い知らされた今も、やはり気持ちは変わらない。

それを否定してしまったら、今までの人生には本当に何の意味も無くなってしまふ。そんな惨めな思いのままでは、死ぬことさえもできない。

…だから…、僕は…。

「ああう…っ、…い、嫌だあ…！ やだあ…っ、やだあああっ！」

泣きながら叫んでいた。とても情けない姿だろうけれど、僕が信じていたものが失われてしまうよりはよっぽど良い。

「な、なんでえ！？　なんでそんなに強情なの？　もう頭の中がトロけて、気持ち良いことしか考えられなくなっちゃってるはずなのに…！」

「やだあつ！ やだあああつ！ 嫌だあああああッ！」

恥を捨てて泣き喚く。一度出始めた涙による感情はどんどん高まっていく。

「ううう…、…分かった、分かったわよ！ もう止めるから泣き止んで…？」

…ね？」

…身体が自由が戻り、動けるようになる。…でも、それでも僕は泣き続けた。その場に蹲って、せめて泣き顔を見られないようにした。

もう止まらなかった。泣くことによつて、心の中で塞き止められていた感情が爆発するように涙が流れた。

「ちよ、ちよつとお…、どうしたら泣き止んでくれるの…？」

良い歳をして癩癩を続ける僕に、サクは戸惑っているようだった。

…それでもせめてもの罪滅ぼしか、蹲る僕を優しく抱きしめて背中をさすってくれた。

……。

…優しい体温がサクの掌から背中に伝わる…。

…サク…。…やっぱりそんなに…。…悪い奴じゃない…。

さつき勃起した時点で、身体が自由が効かない僕をどうにでも好きにできたはずなのに、サクはあくまで僕の気持ちを尊重してくれた。

気持ち良いことに対する意識が高いと言えはそれまでもかもしれないけれど、僕は、サクの持つ優しさのようなものを確かに感じた…。

…こんな面倒臭い僕なんて、さつさと見限って他の獲物を探せばいいのに、しつこいくらい強引に一緒にいてくれる。

…たとえそれが魔物であっても、なんだか嬉しい気がした…。

つづく

この作品における、著作権は著者にあります。

無断での使用は固く禁じます。

午後のお姉さん
編集部より